

編者序

本書は、これまで欧米の医学・心理学雑誌や専門書に掲載された、偽薬効果を扱った大量の文献のうち、偽薬効果という現象を考えるうえで重要と思われる研究の中から、紙幅の関係でごく一部を選定・収録したアンソロジーであり、3年ほど前に出版された拙編書『多重人格障害——その精神生理学的研究』（春秋社）の緩やかな続編に当たる。

偽薬（プラシーボ *placebo*）と呼ばれる、本来は薬効を持たないはずの物質を、当該の疾患や症状に効果のある医薬品と偽って投与した場合であれ、本来は効果のないはずの手術や処置を、効果的であるとして行なった場合であれ、かなりの比率の患者に症状の改善が観察されることは、昔から経験的に知られてきた。偽薬により、自覚症状ばかりか他覚症状にも現実に改善が見られるとすれば——催眠の中でさまざまな驚異的現象が起こるという事実から類推すれば、その可能性はきわめて高いことになるが——その機序の解明は、治療的にはもちろん、学問的にもきわめて重要になる。心の力（と言って悪ければ、心理的要因）によって身体的変化が起こることの裏づけが、さらに得られることになるからである。

本書の第一の目的は、本来は効果のないはずの投薬や手術や処置によって、症状——特に、他覚症状——が本当に改善されるのかどうか、改善されるとすれば、それは一過性のものにすぎないかどうかを、主として偶発的現象の研究や実験的な研究を通じて、読者の方々にご判断いただくことにある。そして、もし他覚症状が現実に軽減される場合があると判断されたなら、現在知られている医学的な知識や概念により、その変化がすべて説明できるものかどうかをご検討いただきたいと思う。その場合、本書に収録されたわずかな文献では、言うまでもなくさまざまな意味で不十分なので、巻末の参考図書や文献を活用し、他の文献にも当たっていただく必要がある。なお、本書に収録した各論文は、著者の立場、偽薬効果の定義、考察の厳密性などの点で多少の相違やばらつきがあるが、上記の目的で編集されたためもあるが、編者による各論文の論評は避けた。

偽薬効果

本書のもうひとつの目的は、歴史的、方法論的、倫理的その他の研究を通じて、偽薬効果やその研究の全体像を俯瞰していただくことである。それにより、偽薬効果という現象が、さまざまな方面に大きな広がりを持っていることがわかるであろう。

本書には、偽薬効果研究の嚆矢とされる 1950 年代のビーチャー論文をはじめ、いわゆる“時代遅れ”の研究がいくつか収録されている。そのような論文を本書に収めたのは、医療史の中で偽薬効果の占める位置をご覧いただきたいためでもあるが、昔の論文の中にも、本質的な意味で古びていない、重要なものが決して少なくないことを編者が確信しているためでもある。

第3章の著者である故アーサー・K・シャピロ教授は、その中で、『パリ薬理学』の編纂者たちが残した、次のような言葉を引用している。

得意の絶頂にある昨今の療法は、現われては消えた、これまでのさまざまな療法とは異なり、評判の落ちる心配がなく、その療法を推薦・実践した医師の軽信性や心酔傾向を浮き彫りにする屈辱的記録に終わるわけではないという保証が、どこかにあるのであろうか (LaWall, 1927)。

1 世紀半前に書かれたこの言葉をシャピロ教授が引用したのは、今から 40 年ほど前のことである。振り返ってみれば、その言葉は、教授の予言通り、当時の“現代医療”にも多かれ少なかれ当てはまっていたように思われる。では、現代についてはどうか。当時とは異なり、現代の“現代医学”にはこの言葉は当てはまらないと、確信を持って言えるものであろうか。その疑問に関しては、もちろん後世の人々の判断を待つほかないが、いわゆる慢性病を筆頭とする多くの疾患に依然として歯が立たない医療技術の現状を考えれば、この言葉が現代の医療に当てはらまないと断言することは、とうていできないであろう。

これまで、わが国でも、偽薬効果という用語や概念はよく知られていたし、現実には新薬の治験や臨床でも、この現象の存在は、当然のこととして考慮に入れられてきた。にもかかわらず、このテーマを扱った論文や書籍は、なぜかわが国にはほとんどなかった。昨年、まとまった著書 (広瀬, 2001) がようやく出版されたが、専門書としては、本書が最初であろう。本書の読者としては、医学や心理学

編者序

の専門家が想定されているが、心の問題に関心を抱いておられる一般の方々にも、医療を影で支えてきたし、これからも支えてゆくであろう力の実在を知っていただくために、ぜひお読みいただきたいと思う。

一昨年(2019年)の11月、アメリカで、国立補完代替医療センターをはじめとする21カ所の医療関係の国立研究機関が主催・後援して、偽薬効果に関する国際会議が開催された(その中で発表された全論文が、近日中に英国医師会から刊行される運びになっている。本書巻末の「参考図書案内」を参照のこと)。偽薬効果という、心身医学ばかりか医学全体が避けて通れないきわめて重要な現象に対して、アメリカの医学界が真正面から総力をあげて取り組む姿勢を見せ始めたことが、この会議を通じて浮き彫りになった。このような時宜を得て上梓される本書が、わが国の偽薬効果研究に対して、ひいては心身問題の研究に対して、いささかなりとも刺激になることができれば、編者としてこれにまさる喜びはない。

本書の構成

本書は、6部構成になっている。第1部には、現在の心身医学的研究に重大な疑念を投げかけた論文が、「序論」として収められている。続く第2部「歴史的展望および総説」には、これまで報告されたこの方面の研究に関する4編の総説論文が収録されている。この4編に目を通せば、この領域の研究の概要がわかりただけよう。そのうち、最初の3編は肯定的な観点から執筆された論文であり、最後の1編が、バランスを取る目的で収められた、少々懐疑的な立場で書かれた論文である(この論文の著者の主張に対する批判に関心のある方は、ブローディらの著書 [Brody & Brody, 2000, pp. 132-38] を参照されたい)。「自然発生的現象」と題した第3部は、食物アレルギー検査の中で自然発生した偽薬効果と思われる現象を扱った論文と、外科手術や心理療法の中でやはり偶発的に起こる偽薬効果を扱った論文を収録している。第4部は、3編の実験的研究とやはり3編の理論的研究とからなっている。そのうち、特に理論的論文をお読みになれば、偽薬効果という現象の位置づけが、研究者の間でも未だにはっきりしていない現状がわかりただけである。

第5部は、偽薬による毒性反応と反偽薬 (nocebo) に関する5論文を収録している。このような現象を通じて、薬物そのものが持つ効果とは別に、“言葉の持つ

偽薬効果

力”の实在が、より明確に理解されるであろう。「偽薬効果の規模と限界」と題する第6部は、偽薬によってどの程度の現象が起ころうのか、また偽薬効果の限界はどのあたりにあるのかという点について書かれた3論文が収められている。最後に、「付章」として、現代医学の“タブー”に取り組んだ興味深い論文を収録した。巻末には、偽薬効果文献を紹介した参考図書案内と、本書に収録した論文の参考文献がまとめて収められている。特に参考文献は、偽薬効果研究のデータベースとしてご利用いただけるであろう。

謝辞

本書を編集するに当たっては、多くの方々に大変お世話になった。まず、本書のために長文の序文をお寄せくださった、偽薬効果の有力かつ公平な研究者である、ハーヴァード大学科学史科アン・ハリントン教授に深く感謝したい。岐阜薬科大学免疫薬理学教室・永井博^{ひろいち}式教授には、薬学や薬理学の用語が頻出する、全体の6割ほどの章をご校閲いただいた。本書に収録した論文の翻訳転載権を取得するに当たっては、毎日新聞社出版局JAMA日本語版編集長・岩石隆光氏、株式会社南江堂専務取締役・高橋正男氏、ヴァージニア大学保健科学センター人格研究室ドーン・E・ハント助手に大変お世話になった。この誌面を借りて深く感謝したい。最後に、各論文の本書収録に際し、翻訳転載許可を与えてくださった、著者のウォーレス・ウィルキンズ博士、アーヴィング・カーシュ博士、ハーバート・スピーゲル博士、ハリス・ディーンストフライ博士、ハーバート・ベンソン博士、ジョゼフ・ジャンコヴィック博士、ならびに編者の無理な要求に可能な限り応えてくださった原著出版社各位に深甚なる謝意を表するものである。

2002年1月31日

笠原敏雄

追記 当初の予定では、分裂病患者の慢性症状に対する偽薬効果を扱った3編 (Hankoff, Engelhard & Freedman, 1960; Taiminen, et al., 1996a,b) を含む数編の論文を収録することになっていた。ところが、それらを本書に収めると、予定の紙幅を大幅に越えてしまうため、今回は収録を見送った。また、マスコミを通じてわが国でも話題になった、フロブヤートソンらの論文 (Hróbjartsson, & Gøtzsche, 2001a) を巡る大変興味深い論争 (Advances in Mind-Body Medicine, 2001, vol. 17, No. 4, pp. 291-318. 本書巻末の「参考図書案内」参照) も、同様の理由で収録を断念した。